

中国貨幣の歴史

25 宋代の貨幣③一折二銭（二文銭）の定着一



けいれきじゅうほう
慶曆重宝
(折二銭)



し わじゅうほう
至和重宝
(折二銭)



し わげんほう
至和元宝
(小平銭)



き ねいじゅうほう
熙寧重宝
(折二銭)



き ねいげんほう
熙寧元宝
(小平銭)

宋は、小平銭しょうへいせんという大きさや重量などが同一規格の一文銭を大量に鑄造、供給することにより銭貨統一を実現し、これを基礎に、それまでの王朝が失敗を重ねてきた折二銭せつじせんという大銭についても紆余曲折を経て広く流通させることに成功した。1枚で二文として通用させる折二銭は、鑄造費用の節約効果が大きいこともあり、宋代以降も継承され、小平銭とともに主要な銭貨となっていた。

宋は、大きさや重量などが同一規格の一文銭を大量に鑄造、供給することで銭貨の統一を実現する。この一文銭は小平銭と呼ばれるが、さらにこれを基礎として折二銭と呼ばれる二文銭を広く流通させることにも成功する。一文などの基準となる銭貨より大きい大銭と呼ばれる銭貨の鑄造、発行はそれまでの王朝が失敗を重ねてきたが、宋においても折二銭が定着するまでには紆余曲折があった。

大銭の発行問題は、四代仁宗（在位 1022～1063 年）の景祐年間（1034～1038 年）に浮上している。産銅の不振から銅銭の鑄造量が減少し、増鑄策として銅成分を減らした悪質な銅銭の鑄造が企てられたことがあり、大銭の鑄造も増鑄策として議に上っている。

この直後の康定元（1040）年、宋にしばしば侵入していたチベット系タンゲート族の「西夏」（1038～1227 年）との間で本格的な交戦状態になると、宋の政府は軍費として支出すべき銅銭の不足に直面する。政府は、増鑄策として、慶歴年間（1041～1048 年）に十文相当での流通を企図した「慶歴重宝」という大銭を鑄造し、西夏戦争の最前線である陝西地域に限定して導入している。この大銭 1 枚は史実では小平銭（約 4g）3 枚で鑄造できる重量とされるが、現存する「慶歴重宝」の多くは 7～8g 程度で小平銭 2 枚程度の重量しかない。この重量差は鑄造時の損耗によるものと考えられている。いずれにせよ十文の貨幣価値に対し、大銭の重量が軽かったため私鑄を招くこととなり、短期間にその貨幣価値を三文、さらに二文と引き下げて私鑄は収まったと伝えられる。なお、この頃の康定・慶歴・皇祐年間（1040～1054 年）に鑄造された銅銭は、その前後の時期の銅銭と比べて残存が極めて少ない。

その後、至和年間（1054～1055 年）に大銭「至和重宝」が鑄造され、当初よりその貨幣価値は二文とされた。宋代における銅銭鑄造量のピークを迎える六代神宗（在位 1067～1085 年）の熙寧・元豊期には、折二銭の鑄造も本格化する。この時期の「熙寧重宝」という折二銭は、銭径 28～32 mm 程度、重量は 7～9g 程度で、重量が小平銭 2 枚以上であるものが少なくなく、折二銭の信用確保を念頭において鑄造されている。

こうして信用を確保し、広く流通するようになった折二銭は、「熙寧重宝」以後も継続的に鑄造されるようになり、「南宋」（1127～1279 年）では、小平銭とともに主要な銭貨となる。12 世紀末頃の折二銭の鑄造量は、銅銭鑄造額の 8 割（鑄造枚数では 3 分の 2）を超えている。なお折二銭の銭名には、小平銭の「通宝」、「元宝」に対し、「重宝」が多く用いられている。

宋代に折二銭という大銭が定着したのは、小平銭の大量鑄造によって銭貨統一を実現したことを基礎に、折二銭の重量を小平銭の 2 枚相当以上にすることで信用を確保できたことが大きい。折二銭の重量・信用を維持するためには、銅原料の費用は嵩むが、一方で小平銭を 2 枚鑄造するのと比べ人件費など鑄造費用の節約効果が大きかったとされている。そうした鑄造費用のメリットがあり、折二銭は宋代以降も継承されていく。

[山岡直人、日本銀行金融研究所貨幣博物館]

[参考文献]

日野開三郎、『日野開三郎 東洋史学論集 第 6 卷 宋代の貨幣と金融（上）（下）』、三一書房、1983 年
宮崎市定、『宮崎市定全集 第 9 卷 五代宋初の通貨問題』、岩波書店、1992 年
宮澤知之、『中国銅銭の世界—銭貨から経済史へ—』、思文閣出版、2007 年
———、『宋代中国の国家と経済』、創文社、1998 年